

令和 元年 6月14日現在

機関番号：13201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K17438

研究課題名(和文) 保育専攻学生の個人差に応じた指導計画作成力向上の指導法

研究課題名(英文) Individual Differences of Early Childhood Education Teacher Training Course Students for Difficulties on Making Teaching Plan

研究代表者

若山 育代(Wakayama, Ikuyo)

富山大学・人間発達科学部・准教授

研究者番号：90553115

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：保育者養成段階において指導計画作成力の育成を図ることが求められているが、個人差に応じた指導がなされていないことが課題であった。そこで、本研究では学生の個人差の認知的側面として指導計画の文字数を設定し、情意的側面として計画作成に対して感じる困難を設定した。結果、熟達した読み手を想定した場合、多い文字数で計画を作成する学生は保育援助や技術に関して困難を感じ、一方、読み手を想定しない場合、多い文字数で計画を作成した学生は、日本語表現に関する困難を感じやすいことがわかった。このことから個人差に加え、計画を作成する状況に応じて指導を工夫する必要があることも明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

保育専攻学生の中でも特に文字を多く書いて指導計画を作成しようとする学生は、熟達者を読み手として想定して指導計画を立案するとき、保育援助・技術に困難を感じていた。このように困難を感じるということは、その点に目を向け、熟考しているともいえる。そのように考えれば、文字を多く書くタイプの学生には、保育援助・技術について重点的に考えさせるために、熟達者を読み手として想定させて指導計画を立案させる指導展開が可能である。このように、本研究の成果は学生の個人差と状況、教授法を組み合わせることで学生の目線に立った指導計画作成指導を展開することへとつながる。

研究成果の概要(英文)：It is important for pre-service teachers to develop their ability to make teaching plans, but few researches show the pedagogical strategies according to individual differences on teacher training in early childhood education. Therefore, this study set the number of words in the pre-service teachers' teaching plan as the cognitive aspect of the individual differences and the feeling of difficulties in making the teaching plan as the emotional aspect of the individual differences. As results, when a skilled mentor is assumed, the students who make plans with a large number of words felt difficulties regarding childcare support and techniques, while when they do not assume mentors, the students who make plans with a large number of words felt the difficulties to their Japanese writing. This results suggested that in addition to individual differences, it is necessary to devise instruction according to the situation of making a teaching plan.

研究分野：保育者養成

キーワード：保育専攻学生 個人差 部分担任指導計画

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 幼児教育専攻学生が保育の指導計画を作成する際に現れる個人差

幼児教育専攻学生による保育の指導計画の作成は、認知的側面と情意的側面からとらえることが可能である。これを踏まえると、これまでの保育の指導計画を取り上げた研究では、両側面の関連性について明らかにした研究は行われていない。例えば、若山(2015)は幼児教育専攻学生が保育の指導計画を作成する際に日本語表記の誤りや幼児教育における指導計画作成のためのルールなどのエラーを起こしていること、また、そのエラーが起こった背景には学生が誤った資料の使用法をしていたり、他者とのやりとりが適切に行われなかったりしていたことを明らかにしている。この研究は、保育の指導計画を作成する際の学生の認知的側面とその背景にある環境の要因の関連性に焦点を当てたものである。

また、若山(2013)はデザイン分野で活用されるユーザ中心のデザイン手法であるペルソナ/シナリオ法を用いて、幼児教育専攻学生の幼児の目線に立って部分計画を作成しようとする行動を導き出す研究を行った。この研究もまた、認知的側面とそれを学生に活性化させる教授法との関連性について取り上げたものである。このように、これまでの幼児教育専攻学生による保育の指導計画作成については、認知的側面と情意的側面の両側面の関連性について明らかにしたものはない。

加えて、先行研究から特に認知的側面については個人差があることがうかがえるが、指導計画の作成における幼児教育専攻学生の個人差を明らかにした実証研究も少ない。さらには、認知的側面に個人差があるとすれば、それに伴って情意的側面にも個人差が生じることが考えられるが、それらの実態を明らかにした研究も指導計画の作成に関して存在しない。

(2) 読み手の効果

説明文の産出には読み手という他者の存在が影響を及ぼすことが明らかにされている。例えば、堀田(1993)は、他者批判を経ると書き手の文章の論点が相手の批判にに応じて書き直されたり、書き手が文章を多方面から推敲したりするようになることを明らかにしている。また、古屋・岸(2016)は、読み手意識が高い人ほど、わかりやすい状況説明文を書くことを明らかにしている。つまり、文章の産出は読み手と書き手という社会的相互作用の行為(Cohen & Riel, 1989)の一つであることが明らかにされている。

一般的に、幼児教育専攻学生は実習中に自らが立案した部分計画の実践を行っている。その際、部分計画の作成については、菅野(2013)が「部分実習を行うに当たっては、(中略)指導案を立案し、準備に関しては指導保育士より助言を受けることが大切である」と述べていることから、学生は実習中に実習指導担当の保育者などを読み手として部分計画を作成する経験を持っている。しかしこれまでの研究では、学生が部分計画を作成する際に実習指導担当保育者などの熟達した他者が読み手として設定されている場合とそうではない場合とで、幼児教育専攻学生の認知的側面と情意的側面がどのように異なるのかについては明らかにされていない。

2. 研究の目的

以上より、本研究では、熟達した他者を読み手として想定させる学生群と、読み手を想定しない学生群を設定し、幼児教育専攻学生の認知的側面と情意的側面の関連性ととともに、それぞれの個人差の類型を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 実験参加者

幼稚園教諭一種免許及び保育士資格の取得を目指す学生 28 名を実験参加者とした。そのうち、4 年生が 10 名、3 年生が 11 名、2 年生が 7 名であった。全ての実験参加者が部分計画の作成方法を学ぶ演習(全 15 回)の履修を終え、単位を取得し、1 度以上の幼稚園もしくは保育所での実習を終えていた。

(2) 手続き

実験は 2 名から 4 名の小集団で実施した。実験中は研究者が最初から最後まで同席し、参加者間の会話は原則行わないように伝えた。実験参加者には、幼児のタイプ(槇 2004)、すなわち、ものタイプ、感覚タイプ、状況タイプの分類表を提示した。これらのタイプについて、槇(2003)は、『ものタイプ』は物とかかわりイメージから形を作るのを好むタイプで、『感覚タイプ』は環境(人・物)に対して感覚的・身体的にかかわり自己イメージを作るタイプ、『状況タイプ』は人とかかわり関係性を作るタイプである」と述べている。これら 3 タイプの 3 歳以上児がそれぞれ 1 名以上ずつ存在する架空のクラスを想像して部分計画を作成するよう、実験参加者に次の教示を行った。

“本日は、ここに示す 3 つのタイプ(ものタイプ、感覚タイプ、状況タイプ)が少なくとも 1 名以上ずつ在籍するクラスで部分実習を行うと想定した部分計画を作成していただきます。対象年齢は任意ですが、3 歳以上児とします。どのような活動を設定するかも任意です。環境構成図はパソコン上で作成していただいても構いませんし、紙をお渡しするので手書きで書いていただいても構いません。完成した部分計画のデータと手書きの紙は調査のためにお預かりします。部分計画の作成の後、別紙のアンケートにお答えいただきます。事前にどのようなアンケート項目があるかを部分計画作成前にご覧いただき、必要に応じてアンケート記入のためにメモをとってください。なお、部分計画作成と並行してアンケートに入力していただいても構

いません。アンケートの回答は部分計画の作成後でも最中でもあなたの進めやすい方法で行ってください。何か質問があれば、お尋ねください”。なお、実験参加者への教示のすべては、紙面に印刷して参加者に渡すとともに、口頭で読み上げた。

実験参加者のうち、15名には上記に加えて次の教示を提示し、熟達した他者によって実験参加者の部分計画が読まれ、評価されるという状況を設定した。なお、この15名の内訳は、4年生が5名、3年生が6名、2年生が4名であった。“お預かりしたあなたの作成した部分計画は、T市内公立保育所勤務歴15年の保育士(女性)にその質を評価していただくことになっています。その先生の詳細情報をお知らせします。お名前はT先生です。T県外の保育者養成大学を卒業し、出身県であるT県に就職時に戻ってこられました。現在は5歳児クラス担任をしておられます。現在の5歳児クラス担任の前は、0歳から4歳までどの年齢も全て幅広く担任してこられました。学生の部分計画の作成に関する研究に協力してほしいと研究代表者から依頼したところ、学生の部分計画に目を通すことを「私も勉強になるから」と快諾してください、楽しみにしておられます”。この教示を受けた15名を熟達者想定群とし、この教示を受けない残りの13名を統制群とした。なお、このように架空の読み手について詳細な情報を作成し熟達者想定群に提示した理由は、従来の文章産出研究における読み手を設定した研究の知見による。大浦・安永(2007)は、読み手となる個人の情報を書き手に多く提示することにより、読み手情報を与えない場合と比較して読み手意識活動が活性化されやすく、質の高い文章が産出される可能性があることを明らかにした。大浦らは、この研究では、大学生に対して道案内の文章を作成させる課題を出し、その際、その道案内の読み手の個人情報をお知らせしている。すなわち、読み手となる男性の年齢、住所、出身、個人特性(方向音痴)、関係(読み手の男性は書き手が受講する科目の非常勤講師)という情報である。これらの情報を受け取った大学生は、そうではない大学生と比べて、より読み手に配慮した文章を書くことがわかった。そのため、本研究でもより読み手意識を活性化するために詳細な読み手の情報を熟達者想定群の学生に提示した。

すべての実験参加者にはこれまで述べてきた教示文とともに、1人1台のノートパソコンを渡した。実験参加者はそのノートパソコンを用いて各自で部分計画を作成し、アンケートに回答した。アンケートの項目は、次の通りであった。“部分計画の作成において、どこでどのような困難を感じましたか。具体的に記述してください”。

(3) 分析材料

- a) 部分計画の文字数 熟達者想定群と統制群が作成した部分計画の文字数をカウントした。
- b) 部分計画を作成する際に感じた困難の種類 部分計画に対する困難の質の指標として、アンケートに書かれた困難感をカテゴリ分けし、そのカテゴリの出現数をカウントした。カテゴリ化の手順は次のように行った。

(4) 分析手順

- a) 小カテゴリの作成 実験参加者がアンケートに記述した困難感一つの困難感ごとに「小カテゴリ名」を付した。例えば、「子供の姿を文章で書く際に、日本語の表現や漢字が正しいかを悩んだ」という困難感について、「日本語の表現の仕方や漢字が適切か悩む」という小カテゴリ名を付す等である。
- b) 大カテゴリの作成 類似した小カテゴリを集め、「大カテゴリ名」を付した。例えば、小カテゴリ「日本語の表現の仕方や漢字が適切か悩む」、小カテゴリ「考えていることと文章で表現することとのギャップに悩む」、小カテゴリ「人にわかりやすい指導案の書き方に悩む」の3つを集め、「日本語表現に関する困難」という大カテゴリ名を付すなどである。
- c) 大カテゴリと小カテゴリの信頼性の確保 と の手順について、信頼性を確保するために、筆者がこの手順を行った後、同じ作業を幼稚園教諭定年退職者であり、現在、保育者養成校の非常勤講師として保育者養成に携わる者1名に依頼した。筆者とその1名によって、小カテゴリ名、大カテゴリ名、大カテゴリに分類する小カテゴリの適切さについて協議し、不一致の場合はカテゴリ名の修正や分類先を変更するなど対応した。
- d) クラスタ分析 熟達者想定群と統制群の部分計画の文字数について、それぞれの群ごとにクラスタ分析を行った。
- e) クラスタと大カテゴリの出現数の関係の分析 クラスタごとに大カテゴリの出現数をカウントし、それぞれの群ごとにクラスタ×大カテゴリの出現率を比較する 2検定を行った。

4. 研究成果

(1) 熟達者想定群のクラスタと大カテゴリの出現数

熟達者想定群が作成した部分計画文字数を用いて、単一連結法によるクラスタ分析を行い、5つのクラスタを得た(図1)。第1クラスタには3名、第2クラスタには5名、第3クラスタには1名、第4クラスタには5名、第5クラスタには1名の調査対象が含まれていた。

これらのクラスタの部分計画文字数について1要因の分散分析を行ったところ、有意な差がみられた($F(4, 10) = 122.42, p < .001$)。ライアンの方法により多重比較を行ったところ、全てのクラスタの文字平均数間には有意な差がみられた(図2)。つまり、第1クラスタは他クラスタと比べて部分計画の文字数が少ないクラスタである。また、第2クラスタは部分計画の文字数がやや多いクラスタであり、第3クラスタはやや少ないクラスタ、第4クラスタは文字数が多いクラスタ、第5クラスタは文字数がとても多いクラスタである。

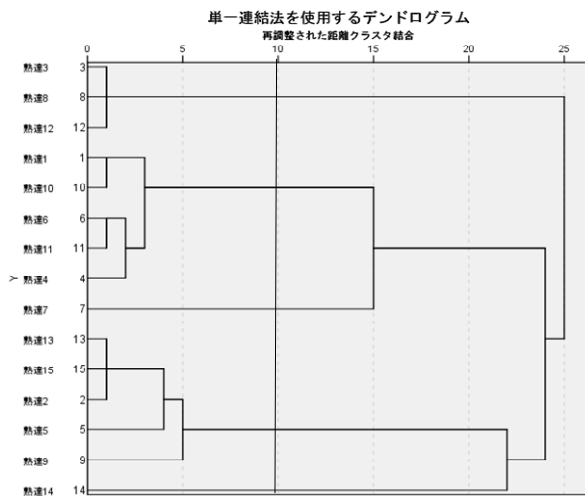


図1 熟達者想定群のデンドログラム

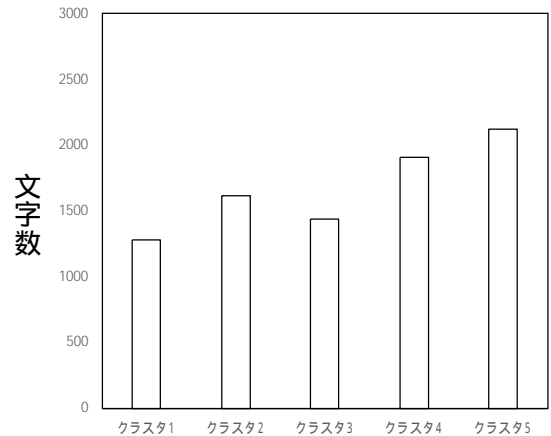


図2 熟達者想定群クラスタの文字平均数

次に、得られた5つのクラスタを独立変数、大カテゴリーの出現数を従属変数とした 2 検定を行った結果、出現数に有意傾向の差がみられた ($\chi^2=19.25, df=12, p<.10$)。そのため、残差分析を行ったところ、第2クラスタの「日本語表現に関する困難」カテゴリーの出現数が有意に多く、第4クラスタの「保育援助・技術に関する困難」カテゴリーの出現数が有意に多く、第5クラスタの「部分計画立案の際のルールに関する困難」カテゴリーの出現数が有意に多かった(表1)。

これらのクラスタの特徴と残差分析の結果から、各クラスタの学生がなぜそれぞれの困難を感じたのかを考察すると次のようになるだろう。まず熟達者想定群における部分計画の文字数がやや多いクラスタである第2クラスタは、日本語表現に関する困難を感じやすいことがわかる。これは、学生の中には、熟達した他者を意識することでその他者に読みやすい文章を書こうと考え、その結果、日本語の表現が適切かどうかを気に掛けたと振り返る者が一定数いるということを示唆している。

表1 熟達者想定群のクラスタごと大カテゴリーの出現数

クラスタ	熟達者 想定群協力者	部分計画 文字数	子どもの姿に関する困難	日本語表現に関する困難	部分計画立案の際の ルールに関する困難	保育援助・技術に関する困難
第1クラスタ	熟達3	1274				
	熟達8	1274	4 (40)	1(10)	2(20)	3(30)
	熟達12	1280	-.2	-.1	-.2	.5
第2クラスタ	熟達1	1573				
	熟達4	1674	8(44.4)	5(27.8)	3(16.7)	2(11.1)
	熟達6	1638	.2	2.8**	-.7	-1.6
	熟達10	1560				
	熟達11	1623				
第3クラスタ	熟達7	1438	3(75)	0(0)	1(25)	0(0)
			1.4	-.7	.1	-1.2
第4クラスタ	熟達2	1897				
	熟達5	1980	6(40)	0(0)	2(13.3)	7(46.7)
	熟達9	1827	-.2	-1.6	-1.0	2.4*
	熟達13	1921				
	熟達15	1910				
第5クラスタ	熟達14	2126	2(28.6)	0(0)	4(57.0)	1(14.3)
			-.8	-1.0	2.4*	-.6

カッコ内は%, 下段は調整済み残差
*p .05, **p .01

次に文字数が多いクラスタである第4クラスタの学生は、保育援助や技術に関して困難を感じている。これは学生の中には、熟達者の存在を意識することによって、どのように幼児を援助するか、どのような遊びを通して子どもたちを育てるかについて多く考える者がいるということを示している。そして、そのような者はそれらのことを多く考えながら部分計画を作成していることから、結果的に保育援助や技術について困難を感じたと振り返るのだろう。

最後に第5クラスタは部分計画の文字数がとても多いクラスタである。このクラスタの学生は、部分計画立案の際のルールに関して困難を多く感じている。学生の中には、部分計画の項目には一つ一つ多くの記載ルールがあることを理解し、その一つ一つのルールに配慮する者がいることを表しているのだろう。そして、熟達者が自分の作成した部分計画を見ると意識する場面では、一つ一つのルールにより配慮するようになり、結果として部分計画のルールに関して困難を多く感じたと振り返っているのではないだろうか。

では、なぜ日本語表現に関する困難を感じた第2クラスは部分計画の文字数がやや多くなり、保育援助・技術に関する困難を感じた第4クラスは文字数が多く、部分計画立案のルールに関する困難を感じた第5クラスは文字数がとても多くなったのか。日本語表現に関する困難は、自身が書いた文章を推敲することを負担に感じるものであるだろう。部分計画の項目は、日本語表現の推敲を必要とする項目は「子どものこれまでの姿」を記載するところが主であり、それ以外は箇条書きや図解の項目などが主となる。そのため、「子どものこれまでの姿」の項目の文章表現を推敲すれば、部分計画の文字数がやや多くなることは考えられる。

一方、保育援助・技術に関する困難は、部分計画の「活動内容」や「子どもの予想される姿」の項を書く際に感じられるものであるだろう。従って、「子どものこれまでの姿」の「日本語表現に関する困難」よりは、複数の項目にわたって吟味が必要であり、その結果、第2クラスよりも第4クラスのほうが文字数が多くなったと考えられる。

最後に、第5クラスの学生の文字数が最も多くなったのは、部分計画という書類の一つ一つの項目すべてに意識を向けているためであろう。すべての項目に意識を向け、その結果、項目すべての文章を推敲したり加筆したりなどして文字数が多くなり、部分計画のルールが多いことに困難を感じるようになったと思われる。

(2) 統制群のクラスと大カテゴリーの出現数

統制群が作成した部分計画文字数を用いて、完全連結法によるクラス分析を行い、3つのクラスを得た。第1クラスには8名、第2クラスには2名、第3クラスには3名の調査対象が含まれていた(図3)。これらの各クラスの部分計画文字数について1要因の分散分析を行ったところ、有意な差がみられた($F(2,10) = 32.06, p < .001$)。ライアンの方法により多重比較を行ったところ、全てのクラスの文字数平均値間には有意な差がみられた(図4)。

次に、得られた3つのクラスを独立変数、大カテゴリーの出現数を従属変数とした2検定を行った結果、出現数に有意傾向の差があった($\chi^2 = 10.79, df = 6, p < .10$)。そのため残差分析を行ったところ、第1クラスの「日本語表現に関する困難」カテゴリーの出現が有意に少なく、第2クラスの「日本語表現に関する困難」カテゴリーの出現が有意に多かった(表2)。

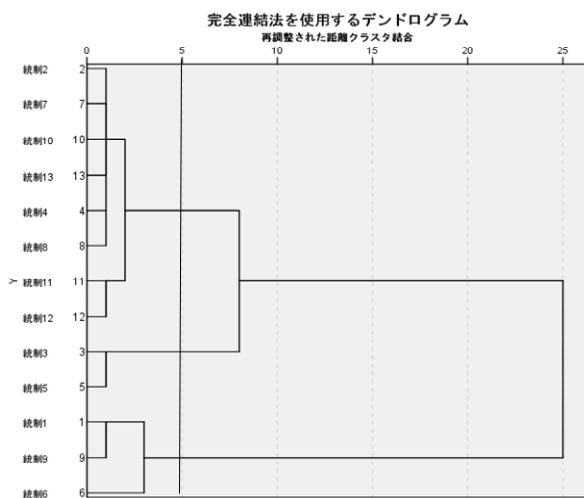


図3 統制群のデンドログラム

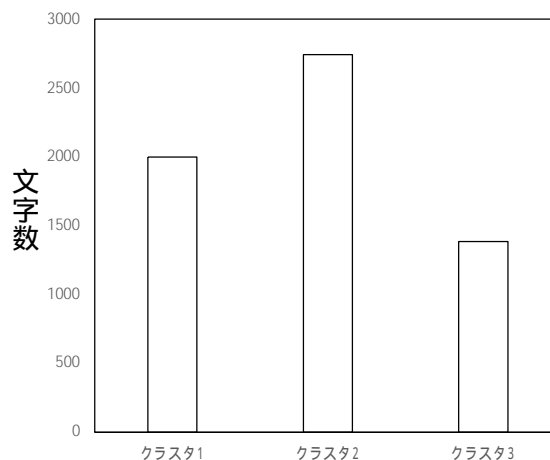


図4 統制群クラスの文字平均数

表2 統制群のクラスごと大カテゴリーの出現数

クラス	統制群協力者	部分計画文字数	子どもの姿に関する困難	日本語表現に関する困難	部分計画立案の実際のルールに関する困難	保育援助・技術に関する困難
第1クラス	統制2	1916				
	統制7	1897				
	統制10	1850				
	統制4	1988	7(21.9)	0(0)	14(43.8)	11(34.4)
	統制8	1960	1.0	-2.7**	.1	.6
	統制13	1873				
	統制11	2207				
	統制12	2272				
第2クラス	統制3	2708	0(0) -1.3	2(28.6) 2.2*	2(28.6) -.8	3(42.9) .7
	統制5	2781				
第3クラス	統制1	1638				
	統制6	1067	2(16.7) -.1	2(16.7) 1.3	6(50) .5	2(16.7) -1.3
	統制9	1454				

カッコ内は%, 下段は調整済み残差
*p .05, **p .01

これらのクラスタの特徴と残差分析の結果から、各クラスタの学生がなぜそれぞれの困難を感じたのかを考察すると次のようになるだろう。まず統制群における中程度の文字数のクラスタである第1クラスタは、日本語表現に関する困難を感じにくいことがわかる。これは、部分計画を作成する際に、学生の中には自分の文章の適切さを気に掛けない者が一定数いることを示している。

一方、統制群における高程度の文字数の第2クラスタは、日本語表現に関する困難を感じやすいことがわかる。このことは、部分計画を作成する際に他者の存在がなくとも自律的に日本語表現が適切かどうかを気にかけて、振り返る者がいることを示唆している。

では、なぜ日本語表現に関する困難を感じない第1クラスタは部分計画の中程度になり、日本語表現に関する困難を感じている第2クラスタは文字数が高程度に多くなったのか。まず、第1クラスタについては、他者に添削されることのない状況では、自分の書く文章が日本語として適切かどうかを振り返ることを行わない学生だと考えられる。日本語表現に関する困難は、主として、他者が読む際に読みやすい文章を自分が産出しているかどうかを意識するために生じる困難である。他者に自身の部分計画を見られることがない状況では、自分の書く文章に注意を払わない学生が一定数存在することを示していると思われる。

次に日本語表現に関する困難を感じている第2クラスタの文字数が高程度に多くなったことについては、こちらは読み手が存在しなくとも、自分の文章の適切さを推敲する学生が一定数いることを示している。他者を意識せずとも、文章を書き、その後見直す、という推敲の過程を自律的に行える学生は、その過程でわかりにくい箇所や説明が不足している点などを書き足しており、その結果、文字数が多くなったのだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

若山育代(2018)部分担任指導計画の作成における幼児教育専攻学生の個人差の類型 - 作成した部分担任指導計画の文字数と感じられた困難の種類に着目して - 富山大学人間発達科学部紀要, 13(2), 225-233【査読無】

〔学会発表〕(計 件)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

研究分担者・協力者ともになし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。